

P201: [江守徹宛]・・・P201「リズム(E)といつても、芝居のせりふ(F)の場合は強弱、高低、遅速の機械的な繰返し(Eの至小化)といった単純なもの(Eの至小化)ではなく、それは第一に喋つてゐる言葉(F)の意味の軽重(Eの至大化)と、第二に話し手(△梓)がその言葉(F)をどういふ感情(心の動き:D1)で喋るか[「形のある『物』として見せる(Eの至大化)」]。即ち、P345『言葉と意味(F)の背後にある哀切な心の動き(D1の至大化)を聲の形に出す(Eの至大化)』といふ、その時々言葉(F)と話し手(△梓)の心(D1)との距離の変化(Eの至大化)と、すなはち字義通りの意味(F:なに)と字義には託し得ぬ裏の意味(D1:なぜ・心の動き)と、この二つが縋ひ交ぜになつて、観客に近附いたり、それから遠ざかつたりしながら(Eの至大化)、観客に心の体操や舞踏を快く行はせる(D1の至大化)ことを意味します」(以下文参照)。

\*「相手(場C')にせりふ(F)を直に掛けるな。せりふ(F)を自分(役者△梓)の心(D1)に掛けろ」⇒「大事なことはまず相手(C')に掛かつてゐるせりふ(F)一つ一つに鉤を付け(Eの至大化)、その都度、それを自分(△梓)の心(D1:心の動き)に引掛けながら言ふ(フレイジング:Eの至大化)、それは必ず動きや姿勢に出る(Eの至大化)筈のものです。あらゆるせりふ(F)は『・・・しながら』(E)のせりふであり、あらゆる動き(E)は『・・・言ひながら』(F)の動き(E)であると心得たら間違ひ無い」。ハムレットが言ふ「せりふ(F)に合はせて動き(E)、動き(E)に即してせりふ(F)を言ふ」と同。(中略)『何(F)を喋るか』ではなく『なぜ(D1心の動き:関係)喋るのか』の『なぜD1』を『何F』の裏に見せてくれて(Eの至大化)こそ芝居の面白味があるのです」(P320上～321『せりふと動き』)。

